

中部の

エネルギーを 築いた

人々

松本電灯を再建し、地元産業界に貢献した
今井五介

～中信(信濃)と上越(越後)を
連携し中央電気(株)へ～

今井五介は、松本市で片倉王国の基礎を築き日本近代製糸業の発展に大きく貢献した。また、1909(明治42)年、松本商業会議所の会頭(5月)、松本電灯(株)取締役社長(9月)、さらに1914(大正3)年に信濃鉄道(株)取締役社長に就任した。このほか1911(明治44)年、私立松本商業学校協議員長などを務めるなど地元の産業界や教育界に幅広く貢献した。今月号は、松本電灯を再建し中央電気(株)の社長として活躍した今井五介を紹介する。



今井五介(出典：今井五介翁伝)

渡米から片倉製糸紡績(株)の設立

今井五介は1859(安政6)年、長野県諏訪郡川岸村(現在：岡谷市)で、片倉市助の3男として生まれた。幼少のころは製糸業を営む家業を手伝いながら、地元の漢学塾で学び、19歳の時に今井太郎の養子となり長女くみと結婚した。

1886(明治19)年、農商務省蚕病試験場(この試験場は、東京蚕業講習所、東京高等蚕糸学校となり、後に東京小金井に移り東京繊維専門学校から東京農工大繊維学部になった)

修得生を終了すると、蚕糸業関係の実地研究ということで4年間渡米した。米国から帰国後、松本市に実兄が設立した片倉松本製糸の所長として赴任した。その後事業は順調に発展し、1895(明治28)年、片倉一族が共同して片倉組を組織、片倉合名会社1906(明治39)年を経て片倉製糸紡績株式会社を設立し、ここに片倉製糸王国を築き、1933(昭和8)年、社長に就任した。

松本電灯(株)から越後電気と合併し中央電気(株)へ

松本電灯(資本金：5万円)は、1898(明治31)年、地元の山崎庄三(穀物商・初代社長)と同族の山崎庄十郎(呉服太物商)等によって設立、翌年、薄川第一発電所(出力：60kW)を建設した。松本市中心にある四柱神社境内には「電気の灯初めてここにもる」の記念碑と記念灯がある。その裏面には、長野県歌「信



四柱神社境内にある電灯点灯記念碑

濃の国」の作詩者・浅井泷の「夜もすがら 油もささず 風吹けど 風にも消えぬ 灯火の影」と刻まれた短歌がある。その後、1908(明治41)年に第一発電所を出力150kWに増設し多額の投資を行ったが、これに収入が伴わなかったため経営難に陥り、明治42年、松本商業会議所会頭の今井五介が社長に迎えられた。

ここに経営再建を模索する中で、供給区域の拡大や増資を図り、第二発電所(出力：600kW・明治45年)、第三発電所(出力150kW・大正9年)、第四発電所(出力：790kW・昭和3年)を下流から建設していったが、工業の発展に伴い供給力の不足を生ずるに至った。

1906(明治39)年、新潟県高田町(現在：上越市)に本社を置く上越電気株が設立され、関川を利用し蔵々発電所(当時の出力：500kW)を建設し事業を開始した。その後、長野県飯山町などに営業区域を拡大していった。1912(明治45)年に糸魚川電気株を合併し越後電気株に改称した。同社は、1920(大正9)年に大谷第一発電所(出力：7000kW)が完成し供給力に余裕が生じたため松本電灯株に電力を融通した。これが契機となって両社の間に合併契約が成立し、社名を中央電気株に改称した。松本電灯は中央電気株松本支社となったが、今井五介は、1927(昭和2)年、同社の取締役社長に就任した。1937(昭和12)年に開業30周年記念式典において「明治40年の今月今日、高田、直江津、新居の3箇所に亘り始めて電灯を点じ…既設発電所の数22箇所 9万KWの発電機を設置せり。池尻川発電所は本邦揚水式発電の先駆と謳

われ、その特色は発電力の定時化をもたらし、これが野尻湖の活用となり…さらに傍系会社(=日本ステンレス株式会社)を創立して独特なる製法により「ステンレス」鋼の多量生産を企て、また低炭素「フェロマンガ」金属マンガ」等の特色ある合金材料を製造し…」と式辞を述べている。その後、太平洋戦争中の昭和17年まで社長の重責にあったが、国内電力体制の強化、配電統制令により、日本発送電、東北配電、中部配電に分割出資し、中央電気は発展的に解消した。

今井五介は片倉製糸の事業家として知られるが、このように新潟・北越と長野・中信の水力発電事業について貢献した人物でもあった。



池尻川水力発電所建屋(出典：水カドットコム)

松本市を中心にした事業活動

片倉製糸は、堅実な経営により年を重ねるごとに旭日昇天の勢いで発展した。今井翁は片倉製糸の外交役として縦横無尽に活躍する一方、地元松本を中心に次のような事業活動を展開した。

(1) 初代松本商業会議所会頭として商工業の発展に貢献

松本市が誕生したのは1907(明治40)年で、当時の人口は約32,000人であった。そして翌年、松本商業会議所が設立され、今井翁が初代会頭に選任された。1927(昭和2)年に法規の改正に伴い松本商工会議所と改称、片倉兼太郎が1941(昭和16)年、2代目会頭に就



松商学園にある今井五介翁の石膏像

任するまで、地元実業界からの要望により会頭職を続けた。

(2) 松本商業学校協議員長として教育界に貢献

慶応義塾で学んだ木澤鶴人は、1898(明治31)年私立戊戌(ぼじゅつ)学会を創立、明治33年に財団組織にして私立戊戌商業学校としたが、生徒数が思うように集まらず経営難に陥った。そこで片倉一族が1911(明治44)年、多額の寄付をして校舎の修理改善と設備の充実を図り松本商業学校と改称

した。また、今井翁は長男の真平を新校舎の建設と質実剛健の教育に当たらせ、多くの中堅人物を実業界に送りだした。戦後の1951(昭和26)年、学校法人松商学園を設立し、現在にいたっている。

松商学園旧講堂には翁の石膏像があり、年に1回、開校記念日に扉が開けられる。また、松商学園高等学校の校門を入ったところに、今井真平頌徳碑があり功績をたたえている。

(3) 信濃鉄道株式会社取締役社長として産業界に貢献

1902(昭和35)年に篠ノ井線(松本～長野間)が開通し、松本駅が開業した。その4年後の1906(明治39)年に中央西線(松本～名古屋間)が開通した。

1910(明治43)年、今井翁を始めとする松本地方の有志が、東京、大阪の財界人と連携し、松本～糸魚川間の鉄道開通を目指し計画をした。しかし不況の影響で財界の協力が得られず、事業は一時とん挫することになった。この時にあたって、これらの難局を打開するため今井翁の出馬が強く求められ、1912(明治45)年、信濃鉄道(株)を松本市に設立、社長に

就任した。そして無配を条件とする株式の分担引き受けを要望し、工事費の低減を図ると共に、建設現場に立ち陣頭指揮にあたった。1916(大正5)年に松本～信濃大町間の全線が開通した。さらに全線の電化工事を行い、安曇電気(株)から電力を購入し、1926(昭和2)年に電車運転に切替えた。

その後、信濃鉄道は順調に営業成績を上げたが、戦時体制に入った1937(昭和12)年に国有鉄道に移管され、政府で敷設した信濃大町～中土間と合わせ、松本～大町～中土間は大糸南線となった。

このように今井五介は、製糸・電気事業以外に、松本商業会議所会頭(1909・明治42年)、松本商業学校協議員長(1911・明治44年)、信濃鉄道株式会社取締役社長(1914・大正3年)などを歴任し、松本を愛する偉大な経済人として活躍した。終戦後の1946(昭和21)年、肺炎で亡くなり東京築地本願寺で法要が営まれ、その後、故郷の今井家墓地に葬られた。

なお、今井五介翁の簡単な年譜は次のとおりである。

(寺沢 安正)

今井五介翁年譜

1859	安政 6	片倉市助の3男として長野県諏訪郡川岸村で生まれる。
1877	明治 10	今井太郎の養嗣子となる
1886	明治 19	明治19年から23年まで米国に滞在
		片倉家の松本製糸所所長として赴任
1895	明治 28	片倉一族と共同して片倉組を組織
1906	明治 39	片倉合名会社を設立
1909	明治 42	松本商業会議所会頭就任(5月)
		松本電灯株式会社取締役社長に就任(9月)
1911	明治 44	財団法人私立松本商業学校協議員長に就任
1913	大正 2	信濃鉄道株式会社取締役に就任
1914	大正 3	信濃鉄道株式会社取締役社長に就任
1920	大正 9	片倉製糸紡績株式会社(資本金: 5千万円)副社長に就任
1923	大正 12	中央電気株式会社取締役副社長に就任
1927	昭和 2	中央電気株式会社取締役社長に就任
1928	昭和 3	東京大宮電気鉄道株式会社取締役に就任
1933	昭和 8	片倉製糸紡績株式会社取締役社長に就任
1940	昭和 15	教育功労者として表彰される
1941	昭和 16	片倉製糸紡績株式会社を取締役社長を辞任
1936	昭和 12	中央電気工業株式会社取締役社長に就任
1946	昭和 21	東京都八王子にて逝去